
1930年代におけるカリダス・ナーグと日本の文化交流

The cultural exchange between Dr. Kalidas Nag and Japan in the 1930s.

目野 由希
Yuki Meno

Abstract:

This paper shows that some points of the immaturity for the cultural interchange policy of the Japanese authorities before the World War II thought Dr. Kalidas Nag's contacts with Japan.

Dr. Kalidas Nag who was one of the outstanding cultural anthropology from Bengal in India and he made attempts to contact with Japanese literary people and authorities for the cultural exchange with several ways from 1927 though 1941.

First, he searched the way to contact them thought his intimate pro-Japanese French friend, Romain Rolland. Second, he could have the exchange with Japanese delegate as a chairperson of India (Bengal branch) at the International Pen Club. Third, he published a book from KBS (Kokusai Bunka Shinkokai, International Cultural Relations and Modern Japan, currently Japan Foundation. Finally, he have established a Japanese library with obtaining the books from the Japanese Ministry of Foreign Affairs.

Even with the attempts those above, he could not succeed in the exchange due to the insufficiency of the Japanese cultural policy. And, we can also see its characteristic in the one after the World War II.

Keywords: *Kalidas Nag, Pen Club, KBS*

キーワード：カリダス・ナーグ、ペンクラブ、国際文化振興会、文化政策

はじめに

本稿で扱うカリダス・ナーグ（Kalidas Nag, 1892-1966：本稿では以下「ナーグ」と表記）とは、日本と関係の深いベンガル出身の知識人である。

彼は現在の日本では、ほとんど知られていない。また、いくら日本と関係が深いとはいえ、彼の来日などの記録文献は、ほとんど入手困難なのが現状である。こうした状態にあるインド人について、地域研究を専門としない人間が言及するのは、本来ならば僭越であろう。しかし、それでも日本文学研究者が、拙いながらも彼の評価を行うべき理由は複数ある。特に重要な理由は、およそ次の二点となる。

ひとつは、彼は1930年代に国際社会のなかで孤立の道をたどる日本に向け、国際協調主義的な文化交流をもとめようとして、何度も接触を繰り返した人物だという点である。その際、彼は特に、文学者や文学研究者たち、また日本の文化政策担当者のコネクションを通じて、複数の方法で、日本との文化交流の経路を構築しようと試みた。いずれも失敗したようではあるが、貴重で例外的な試みであり、現在の再評価に値すると思われる。

もうひとつは、せっかくの上記の試みも、日本の太平洋戦争開戦に伴う政治情勢の変遷のため、地域研究や史学の専門家が扱えるような、公式な記録に残りづらい傾向にある点である。つまり、太平洋戦争中から戦後にかけて、親米的な行動を継続したナーグは、1941年までの枢軸国側との接触記録をほとんど残していないのである。日本の文学者の紀行文や回想文、また海外の日本図書館についての調査などに、断片的に当時の彼の様子を伺うことができるのだが、当人は、日本やイタリアでの活動記録を公開していない。

また、ナーグが日本と接触しようとした始めた始めの時期は、おそらくフランス滞在中、ロマン・ロランを介したものが最初ではないかと思われる。そうすると、次のような地域研究者の指摘も視野にいれることとなるかもしれない。

藤井毅氏は、ラースピハーリー・ボースとスパーシュ・チャンドラ・ボースについて論じた際、この二人に関連して考える場合の、今後インド現代史の考究課題として残されている研究領域を五点挙げられた。このうち、最初の二点は「①枢軸国の対インド工作・政策、②ヨーロッパ大陸部、わけても枢軸国における在留・亡命インド人の活動」*¹になる。

本稿では、①ロマン・ロラン経由の日本との接触の試み、②国際ペンクラブ組織を通じた交流の試み、③日本の外務省や国際文化振興会へのさまざまな協力、④彼のアジア太平洋地域に向けるまなざし、について触れるが、①と②は、カルカッタから東京への直接の発信というより、英仏で高等教育を受けたナーグの、ヨーロッパ経由での日本との交流という方が、実態に近いようなのである。

ボース一族とも交流のあるナーグの1930年代について、本稿では、日本側との関係に絞って考察してみたい。

1. カリダス・ナーグ略歴

美術史家であり、編集者・大学教授・文化人類学者としても活躍したナーグの生涯については、まだ研究がほとんどされておらず、現時点までで資料が十分揃っているともいいがたい状態である。そこで本稿では、日本との接点が多かった1930年代を中心として、日本との文化交流事業に関する

ナーグの活動とその関連事項について、本稿の最後に年表を付したのでご参照頂きたい。

ナーグはベンガル地方で生まれ、少年時代からタゴールを崇拜し、日露戦争のニュースを聞いてから親日家になったなどの記録を残している*²。長じてからは、まずイギリス、ついでパリに留学し、シルヴァン・レヴィに師事した。フランス遊学中に知遇を得たロマン・ロランとは、彼が亡くなるまで文通を続けるなど、息の長い交友関係を保った。1930年頃にはすでに学術講演旅行を行ったり、タゴールの弟子として、ノーベル賞受賞後の彼の南米行や中国行に同行するなど、若い頃から旅慣れた学者であった。

雑誌『The Journal of the Greater India Society』編集長でもあったが、この仕事は、義父との関係から始めた事業であったようである。しかし後年になって、編集者の資格で、ベンガルにP.E.N.支部を設立し、国際ペン大会に出席する立場となる。ここで、島崎藤村や有島生馬と邂逅することとなった。野口米次郎を評価し、来日経験を持ち、カルカッタに日本図書室を開室し、日本の外務省や国際文化振興会に協力するなどの親日派であった。同時に、イタリアとも文化交流事業を行っている。しかし、こうした枢軸国との文化交流を執り行った件は、英文で書かれた彼の著書にはほとんど現れておらず、わかりにくくなっている。

インド学者、東洋美術史学者、民族学学者、教育学者でもある。スリランカでは学長(Principal, Mahindra College, Ceylon (1919-20))を勤め、カルカッタや北米で教鞭をとり、ハワイ大学のThe Oriental Institute設立に協力した。著書はほとんどが英語で、一部フランス語などになる。

ロマン・ロランによると、芸術家肌のタゴールより、実務能力のあるナーグの方が、近代的な行動様式に馴染んで講演旅行なども現実的に手配できていたようである*³。

その生涯の複雑さのため、いまだに回顧録刊行が順調に進捗しておらず*⁴、彼が国際社会で大きく羽ばたいて重要な仕事を立て続けになした、肝心の1921年より後については、現時点で続刊が刊行されていない。

ちなみに、東京大学総合図書館所蔵のナーグの著書、“*Above all nations is humanity*”には、1937年3月29日、於ヴィルヌーヴの記載とともに、ロマン・ロラン当人のサインが書き込まれている。いかなる経緯で、ここに至ったものであろうか。

2. ロマン・ロランを介した片山敏彦への私的な接触

まず最初に、片山敏彦について言及したい。

1927年夏、当時は法政大学予科ドイツ語専任教授だった片山敏彦は、ロマン・ロランから一通の手紙を受け取っている。それは当時の日本の文学者・研究者に海外から舞い込んだ執筆懇話として、もっとも美しい例のひとつかもしれない。

私は今度はあなたを私のインドの友たちと知り合うようにしなければなりません。それはほんとうに重要なことです。インドの友たちはとくにあなたがたを理解し、あなたがたと結びつくべき人々たちです。私と親しいカリダス・ナーグ（カルカッタ、アッパー・シスキューラー・ロウド九一）へ、私の紹介だと言って（あなたか尾崎喜八かが）手紙をお書きなさい。ナーグはカルカッタ大学の少壮教授で、ラビンドラナート・タゴールの友であり、インドの

最も有力な雑誌の一つである「ザ・モダン・リビュー」の創刊者であり発行者である、ラマナンダ・チャッタージーの女婿です。カリダス・ナーグはその雑誌の編集長です。夫人は、ベンガルのもっと愛すべき小説家の一人です（彼女はベンガル語で書いています）。私はカリダス・ナーグとヨーロッパで知り合いましたが、その時ナーグはパリの東洋学校（エコール・デ・シヤンス・オリエンタル）で数年間学んでいて、りっぱな論文で博士の学位を得たところでした。彼は私のガンジーについての著作に大いに助力してくれました。深い愛情と、気高い品性との持ち主で、まったく信頼できる人物です。あなたがたは当然友となるべきですし、またあなたや日本の小さなグループの人たちは時おり「ザ・モダン・リビュー」に執筆すべきです*⁵。

それではこの時片山は、どのような行動をとったのだろうか。

ロランはさらに、1930年5月8日の日付のある手紙で、片山にこう書き送った。

親愛な友／私たちは六月にあなたにお会いできればうれしく思います。一週間以前に私たちに予告しておいてください。そしてあなたにご返事をするあて先きを告げておいてください。六月の末ならばあなたは私たちの家で、私がたいそう愛しそして尊重している私たちのインドの友、カルカッタのカリダス・ナーグ教授にお会いになることになりそうです。彼と知り合われるといいと思います。彼はあなたと同様に、普遍的人間性の意識と教養とが現われている人々－私のほんとうの友の一人です*⁶。

ロランは『出家とその弟子』に序文を書き、仏語訳の仲介も行っている。この親日的フランス人は、自分を敬愛して自宅にも訪問した片山に好意的で、彼に二度もナーグを紹介する手紙を書いているのだ。

ただし、当時ロランと片山の間で、十分に意思の疎通がはかれていたかどうかははっきりしない。片山側からのロラン印象記と、ロラン側からの片山の記憶を突き合わせ、さらに友人の随筆を併せ読んでみよう。

まず、片山の随筆である。片山は、1929年7月に一人でロランに会いに行った際の印象を、詩のように美しい文章で残している。この名文のうち、彼らの具体的な会話の内容や、ナーグの名が登場するのは、以下の引用箇所のみである。

携えて来た日本の友らからのおみやげの品、またパリのマルチネ夫人、バザルジェット未亡人から托されて来た贈物をロランとマドレーヌとの前に出した。まごころのこもったそれらのおくりものに対してロマン・ロランは大げさな感謝の身ぶりを少しもしなかった。しずかにつよく「ありがとう（メルシー）」と言い、しみじみとそれらの品を手にとって眺め、「美しい」とか「いい」とか独り言のように言っているだけだった。／まばゆいように美しい原色のハーモニーで作られた刺繍が卓の上、ピアノの上にかけてあった。どこでできたものかを尋ねたらハンガリーの農民の作った刺繍だとのことだった。マントルピースの上にはトマス・ハーディの胸像の写真を二つとインド人の夫妻の写真を置いてあった。（それはカル

カッタ大学の教授カリダス・ナーグの写真であることを次の日マドレーヌが話された。)*⁷

この他、ロランと片山と一緒に屋内の写真や絵画を鑑賞したり、ロランが本棚から手紙を取り出して片山に渡し、デッサンの複製を開き、若いハンガリー人画家の手になるタゴールの肖像画を見せた等、静かな、実に楽しそうな交流が語られる。

彼らは互いに、同時代で最高の芸術鑑賞家同士として相見えたような印象を受ける。また、そういった一面も実際にあったのかもしれない。

しかし、ロランはナーグについては事前に、片山に実際に紹介するとまで手紙に書いていたはずである。ところが、なぜかここでは、ナーグについてロランが触れた描写はない。それどころか、わざわざ翌日になってから妹のマドレーヌが片山に、写真の人物について教えたということがついでのように補足されているだけである。これは、どういうことなのだろうか。

実は、ドイツ語教師である片山は、フランス語会話は不得手だったのである。ロマン・ロラン側からの片山像を確認してみよう。

一九二九年七月二日－片山敏彦の来訪。(中略)「フランス語」を少し練習してから、いま私に会いにきたのだ。その話すフランス語はかなりたどたどしいが、その友の上田秋夫よりはるかにうまい。－彼にはひじょうに好感がもてる。こころよく、賢い顔。まったく素直で、率直でありながら、いささかも度を過ぎるところがない。彼はヨーロッパ芸術のあらゆる領域にわたってひじょうに教養があり、またわれわれに関することについて、ほとんどわれわれと同じくらい何でもよく知っている。彼は日本の礼儀に従って、彼や彼の妻や友人たちからの土産物を持参した。――彼はたおやかな彼の若い妻の写真と、尾崎のとても可愛い幼い娘の写真とを見せた。私たちは、いっしょにヴィルヌーヴの周囲を幾度も散歩した。……会話によってじゅうぶんに理解し合うことは困難であった。しかしそれだけでもう、あの真実な愛情と、あの男らしくてやさしい性質の精神的な美しさを、じゅうぶんに感じる事ができた*⁸。

つまり、ロランが特に口数少ない芸術鑑賞者だったわけではないのである。先の場面は、片山に分かりやすく言葉を選びながら語るロランとその言葉を、片山が彼なりに解釈し、この記憶を再構成して書かれたものだろう。

片山の、ロラン再訪時の同行者の文章も挙げよう。すでに一度ロランに会った片山に同行し、自分も始めてロランと会うことになった彫刻家の高田博厚は、以下のようにロランとの対談を回想している。

それからの対談。いや、彼ひとりが語るのを私たちがきくだけである。二人ともフランス語はしゃべれず、片山のドイツ語も私のイタリア語も役立たない。(中略) こういう談話は二時間も続き、その間に片山は私の彫刻作品の写真を十数枚見せたが、彼はただ黙って見ていた*⁹。

こうして、親アジア派・反権力のフランス人ロランによる、アジア人同士の、国策とは無関係の交流仲介はうまく進捗せずに頓挫してしまった。あるいは、EU統合をはじめて構想し、国際知識人会議を提唱したりベラルなノーベル賞作家のスケールが、片山に比して大きすぎたのかもしれない。また『片山敏彦著作集』を読む限り、片山から積極的にナーグに接触しようと試みたり、言及した形跡はない。ナーグから手紙を貰ったことはあったようだが、その後の交流の展開は、管見の限りでは片山は記録していない。ロランを敬愛して手紙を交わし、ヨーロッパを愛した彼は、しかしロランの紹介するインド人とは、それほど交際を深めるつもりはなかったのかもしれない。

ただし、タゴールの70歳記念に、秘書が国内外の彼の友人達から原稿を募って刊行したアンソロジー、Ramananda Chatterjee; *Golden Book of Tagore*, The Golden Book Committee, Calcutta, 1931には、片山もロマン・ロランとともに寄稿している。また、著作集のなかには、ロランへの傾倒とともにタゴールへの言及が見られる場合が多い。なので、片山はアジア社会に無関心であったというより、正確には、「ヨーロッパ文化圏を経由しないアジア人同士のコミュニケーション」に、関心がなかったのではないかと推されるのである。

これが、「ロマン・ロラン宅という国際的な文化人のサロンを活用して、日本の文化政策とは無関係に、インティメートな形で接触しようとした日本の文化人とナーグとの関係、その顛末」になる。

3. 外務省と国際文化振興会を通じた野口米次郎との接触

親インド派として知られる詩人の野口米次郎は、来日したタゴールの応接の際のナーグと接触したが、彼等の関係はその後、先述の片山や後述の島崎藤村などと異なり、機会を得て深まっていった。これは、政策的な文化交流の制度のうえで、彼等が親しくなれる土壌が調えられていたのに加え、野口が抜群の英語力を備えており、ナーグが実務に強くて交際上手であったからであろう。具体的には、野口が外務省と国際文化振興会にインドに派遣され、カルカッタ大学他の大学で講演会を行うなどしたため、その過程で、野口とナーグは親しくなっていた。野口とナーグの関係については、1935年10月から1936年2月までのインド滞在記である『印度は語る』（第一書房、1936）に詳しい。

本書は、インド各地で歓迎され続ける野口の自賛に充ちているが、このインドにおける野口米次郎という日本の詩人の歓待ぶりは、ナーグの事前の手配のよさによるものなのである。

午前中ナグ博士と会見。この男は嘗てタゴールに同伴して日本を訪問して以来私の友人で、私の印度訪問に際しいろいろと斡旋した人（前掲書、243頁）。

また、ナーグが代表をつとめる、インドペンクラブのベンガル支部にも顔を見せている。

午後五時半ホテル・マゼスチックに開催されたベンガリー・ペン・クラブの歓迎茶話会に出席（前掲書、251頁）。

野口とナーグの関係については、考察すべき問題が多い。これについては、稿を改めて論じる予

定である。

野口は語学力も十分に備えており、当時の日本の文学者としては例外的に、海外での講演活動に能力のある人材であった。後年の野口の国粹化と、最晩年のタゴールとの論争や太平洋戦争の開始、こうした要因が重なった果てのタゴールとの派手な決裂さえなければ、野口とナーグの関係は、理想的な日印文化人交流に発展していった可能性もあったのかもしれない。

4. 日本の外務省・日本ペンクラブ経由での島崎藤村・有島生馬との接触

1936年2月の野口の帰国後、1936年9月には、ナーグはベンガルペンクラブ代表としてブエノスアイレスでの国際ペンクラブに出席する。ここでは、日本ペンクラブ会長島崎藤村、そして副会長有島生馬が、ナーグと、会議や往路の船上で近づくこととなった。

この年の南米での国際ペンクラブ大会出席は、外務省と国際文化振興会も支援する事案であり^{*10}、ナーグと藤村らは次回1940年ペンクラブ開催候補地（ムンバイと東京）のライバルとして戦うことになる。文学者の公務とも、文学者の国策協力とも表現できうるものであろう^{*11}。

議事録を確認すると^{*12}、実際にここで発言を繰り返したのは生馬なのだが、その生馬はほとんど当時の記録を残していない。藤村による大会出席と世界旅行の記録である紀行文「巡礼」には、ナーグ、そしてインドの記述に、多くのページが割かれている。

この甲板の歩廊でわたしは毎日のやうに顔を合はせる一人の印度人の客もある。船があのコロomboの港を離れようとした時、最後のランチに送られて乗り込んで来た客だ。この人が印度文筆業者の代表N博士だ。聞けばわれらと同じく南米アルゼンチンに開かる、国際ペン大会出席のため、印度のカルカッタ市より五日の汽車旅の後、この船にまで上つて来たところであつたといふ。わたしはA君と共に、この奇遇をよろこび、同じ亜細亜からの同行者として、その日以来顔を合せてゐる。こんな思ひがけない同船の客を迎へて、日頃想像する近代印度を知る上に多くの手が、りを得たことはうれしかつた。N博士は曾て巴里の仏蘭西大学に遊学したこともあり、英仏語に精通し、長くカルカッタ大学の講師として印度青年を教へてゐるやうな閱歴を持つ人である。（中略）このN博士の口から、わたしは岡倉覚三の名をも聞きつけた。あの天心居士の遺著「東洋の理想」、その他名高い「茶の本」などが印度人の間にも読まれてゐるといふは床しいかぎりである^{*13}。

特に、「夜明け前」の続編であり、南米からの帰国後に書かれた未完長編「東方の門」には、ほとんどこの紀行文がそのまま使用されている箇所がある。それが、「巡礼」の以下の箇所になる。

伝へ聞く、印度はさう不甲斐ない国民のみの住むところではない。英国政府が政治上、印度人をして外国人の支配下に立つとの觀念を生ぜざらしめんがためには種々の方便をめぐらしたとも言はる、が、世界最古の文明国を祖先の地とする印度人の中には氣概あるものも起つて國民の覺醒を促しはじめたのは、十九世紀の中頃よりであるといふ。いかにせば彼等の支配者をしてかく強力ならしめた原動力に対抗し得べきやとは、それら印度人士の念頭を離れないことであつて、西の歐羅巴よりする科學的文明なるものは日夜彼等が研究の對象となつた時代もあつたとか。極力西洋を輸入

することに努めた吾国明治初年のことも思い合はされる。そのさかんな反動は印度にも興つた。古代印度に帰れとの声がそれだ^{*14}。

作者の死によって中絶した「東方の門」は、作品構想では岡倉天心の活躍が予定されていた、と北米まで藤村の世界旅行に同行した生馬はいう^{*15}。前述の引用を受けた天心の（主に海外での）活躍が構想されていたのであれば、ベンガル文化人たちとの交流は無視しえぬ要素となったはずである。藤村が、南米で出会ったナグから豊かな着想を得ていたのは想像に難くない^{*16}。

気にかかるのは、「東方の門」が「夜明け前」の続編として書かれた点である。

同書は、ついに狂死する幕末の国学者の運命を中心に描かれた「夜明け前」の続編であり、インドと天心が構想に含まれ、『過海大師東征伝』を手に旅立つ僧が現れるのである。日本の近代化の苦悩と、植民地インドの苦悩が重ね合わせられる展開が十分に想像されるだろう。これまでの研究では、同作品は主として「夜明け前」との連続性を中心に考察されてきた。この作品が作者の死によって未完で終わったことは、藤村を愛する研究者によって「幸運」と表現されている^{*17}。

ただ、この展開は、藤村個人が国粹的な傾向を示し始める「夜明け前」の指向の進展であると同時に、各国代表がそれぞれ自国の国益を主張しなければならない国際会議に出席した、日本ペンクラブ会長としての藤村の高揚感も手伝って発生したアイデアである点も、勘案すべきであろう。

5. ホノルルのベンガル知識人

ブエノスアイレスでの大会後、南米帰りのナグは、国際交流を主題とした冊子を刊行する。これは、ハワイ大学での1937年1月22日の講演に基づくものである。Kalidas Nag (1937). “Above all nations is humanity” “*Maluna a’ e o na lahui a pau ke ola ke kanaka*”, Honolulu: University of Hawaii. がそれである。本論の主旨は、ハワイを中心とした環太平洋文化圏の可能性であり、ハワイとハワイ大学に、人種や国家の別を超えて人々が手をつなぎあえる場所としての魅力を見出している。

この冊子の中で、「Japan」という語が出てくる箇所は、13頁の次の一箇所しかない。

Then the Carnegie Corporation would find it necessary to establish a Pacific Division of its Institute of Race Relations; the Rockefeller Foundation would build here laboratories for the study of Oriental and Pacific hygiene; the Carnegie Endowment for International Peace would endow chairs for the study of peace problems of the Orient and Pacific zone. So also the Latin American universities, the universities of China and Japan, of the Philippines and of India, the scientific institutions of Indonesia and of the Near East would gradually come to collaborate with the University of Hawaii, which is the advance-guard of American culture in the Pacific and the Orient. (拙訳：その時、カーネギー財団は、人種関係研究所・太平洋部局設立の必要について気付くだろう。ロックフェラー財団はハワイに、アジア・太平洋の衛生学研究のための研究所を建設するだろう。国際平和カーネギー基金は、アジア太平洋地域の平和研究のための講座ポストを（大学などに）寄附するだろう。また、ラテンアメリカの大学、中国と日本、フィリピン、インドの大学、またインドネシアと近東の科学学術団体は、次第に、アジア太平洋の中でのアメリカ文化の最前線であるハワイ大学と協力するようになるだろう。)

各種のファンドを受けながら展開する、大学間共同研究による地域研究・文化研究の構想である。現代の文章であってもおかしくないほど時代性を超えた内容であり、かつ、当時としては極めて斬新といえるのではないだろうか^{*18}。

冊子中では、ブエノスアイレスでの国際ペンクラブ大会の話も言及されているが、藤村や生馬については全く触れられていない。その後も、管見に入る限りでは、晩年の簡単な言及を除いて^{*19}、ナグは藤村に興味を抱いた形跡はないのである。

もともとナグは南米出発前から、ハワイ大学教授のGregg Manners Sinclair（のちにハワイ大学学長）と研究上の協力関係、そして家族ぐるみの友人としての関係を保っており、第二次大戦後もその関係は継続している。講演と冊子刊行も、南米行以前からのハワイ大学との共同研究の成果なのである。藤村よりはるかに長い国際的活躍のキャリアと広い視野をもつナグは、藤村と、天心について語る時間を持ったかもしれない。しかし、藤村の国家主義的になりはじめた思考（あるいはのちの大東亜共栄圏構想）に共感を寄せたとは、まず考えられないのだ^{*20}。

6. 終わりに

1940年にムンバイで国際ペンクラブ大会を行うという計画が潰れて後、ナグはベンガルペンクラブから距離を置いてしまう。戦後、東京で国際ペン大会が開催されていた時、彼は参加しなかった。そんなナグであるが、別紙の年表で示したように、1941年の真珠湾攻撃までは、他のベンガル人たちが日本から距離を置き始めた1940年になっても、日本の外務省と協力し、カルカッタで日本図書室を運営しようと努力を傾けている。

この努力も、結局は水泡に帰してしまう。

そしてナグや日本の文化発信者たちの努力は、同時代の海外の文化発信組織のように、戦後も継続的に拡大し、より充実するということなく、次第に忘却されていった。

しかし、ナグと彼を巡る出来事は、直接には、大東亜共栄圏の負の遺産の範疇には入っていないはずである。この忘却は敗戦国ゆえの忘却ではなく、むしろ、当時からすでに日本の文化外交が持っていた、持続性のなさそれ自体に由来する忘却なのではないだろうか。

小説家・翻訳家の高杉一郎は、片山敏彦について回想した際、若い頃は片山とはロマン・ロランの芸術的な側面ばかり見て、平和のための行動と革命家としてのロランを無視している、と直接批判したが、のちにそうではなくて反ファシズムの抵抗者であると分かった、と敬意をもって振り返っている^{*21}。しかしこの根拠は、「ニューヨークのロングマンス社から出た「生ける思想」叢書、パリのコレア社から出た「不朽のページ」叢書」をともに読んだ経験によるという。こういう片山の周辺からの報告を読むと、片山は活動的な国際派というより、書齋派文化人であったとあらためて分る。

当時の片山を、日本の軍事政権への批判をしなかった文化人だから、という理由で否定的に評価するのは馬鹿げている。とはいえ、かりに1930年代当時の国策的文化政策と文化交流が、それが「国策」であるがゆえに問題なのであれば、藤村や片山などの作家・学者は、ナグのように、個人的で独立した信頼関係を築いて交際できなかったことにも問題はあってもいいのだ。

相対的に言えば、藤村の事例の方がむしろ文化外交としては成功に近い。よりうまくいった例は、

野口米次郎の事例であつたろう（ただし、最終的にはタゴールと対立し、日印文化人対立がメディアをにぎわすという、一番望ましくない結果に終わってしまった）。

日本ではしばしば、当時の知識人たちによる人民戦線成立の可能性が取沙汰されたり、現在でも文学者、特にペンクラブ会員は伝統的に公権力に対峙すべき存在として語られている。しかし、ナーグの試みた日印文化交流の結果からみれば、むしろ、われわれ日本人にとっては、官僚によってひかれたレールの上を走ることも、一義的に悪とばかりはみなせないのではないだろうか。確かにカルカッタの日本図書室は、岡村敬二によってそのお役所仕事の失策を指摘されてはいる*²²。しかし、少なくともこのケースでは、ナーグの意思がある程度まで日本側に理解され、協力関係も成立しているのだ。

現実的な国際化に際して、われわれには、より柔軟で戦略的な思考回路が要請されているのかもしれない。

1933年の国際連盟脱退から日米開戦まで、外務省は国際文化振興会・日本ペンクラブ創設などを通じ、日本文化の対外的プレゼンスを高めるため、さまざまな活動を展開した。こうした国際文化政策は日米開戦後も継続し、文学の領域では、1940年東京での国際ペンクラブ大会開催計画が中止になると、その代わりのように大東亜文学者会議が催された（1942—1944）。戦後になり、1957年には改めて東京でのアジア初の国際ペンクラブ大会が開催され、1972年の再度の国際大会を経験し、2010年の三度目の東京国際ペンクラブ大会をひかえた現状へと連続している。

これら諸活動を、軍国主義の拡張に伴うナショナリズムの高揚、そしてその制度的継続と批判して憂え、また、新たな東京国際ペンクラブ開催計画を近年のナショナリズム志向とつなげて解釈するのは、さほど困難ではない（もちろん現状では、日本はアメリカ・イギリスに次ぐペンクラブへの第三位の出資国であり、国際社会での役割分担の意義は戦前とは異なる）。とはいえ、東京での国際ペンクラブ計画を通じて現在まで継承されているのは、ナショナリズムだけだろうか。当時の、日本の文学者たちの文化発信の不器用さ加減も、数え入れてもいいかもしれない。

もちろん不器用とはいえ、それなりの成果を挙げてしまった以上、戦前から戦中の文化政策は軍事的に諸外国への侵略行為を援けたとして批判の対象となるだろう。同時に、政策の「成果」を前提とした文化政策批判だけでなく、どのように日本の文学者達が文化発信に不器用であったかを、複数国間の関係性の網の目のなかで振り返ってみるのも、今後に益する可能性があるのではないだろうか。

-
- * 1 「二人のボース」が命を賭した、独立への闘い『月刊自由民主』（自由民主党、2007年12月号）、67頁。
 - * 2 Kalidas Nag; *Memoirs volume one (1891－1921)*, Writers Workshop Publication, New York, 1991.
 - * 3 『ロマン・ロラン全集 31』（みすず書房、1982）の複数箇所。
 - * 4 ナグの回顧録であるKalidas Nag; *Memoirs*, Writers workshop graybird book, Calcutta, 1991.は、volume one (1891-1921)までしか刊行されていない。1921年以降のナグの事跡については、内容のデリケートさ、調査が進展していない点などを理由として、なかなか続刊が刊行されない状況である由、東京外国語大学の藤井毅教授よりご教示頂いた。
 - * 5 『ロマン・ロラン全集 36』（みすず書房、1979、引用は1984年の第2刷）、436頁。
 - * 6 * 5に同じ、477頁。
 - * 7 「ヴィラ・オルガの思い出——親しき友らにささぐ——」『片山敏彦著作集 2』（みすず書房、1971、引用は日本図書センターによる1998年9月の復刻版より）、244頁。
 - * 8 『ロマン・ロラン全集 35 書簡・日記』（みすず書房、1962、引用は1968年の第2刷）、130頁。同じみすず書房版でも、現行の新版には、ロランによるこの旧版での片山評は収録されていない。ただし、新版『ロマン・ロラン』全集中では、フランス滞在一年後に、ロラン宛てにパリからドイツ語で手紙を書いた片山をたしなめるロランからの書簡も収録されている（36巻）。全集の新版翻訳メンバーには片山も名を連ねている。当時の片山は、ドイツ語の方が楽だったのであろう。
 - * 9 高田博厚「ロランを訪ねた日」『片山敏彦著作集 月報3』（『片山敏彦著作集 2』）、2～3頁。
 - * 10 「大倉はこの折にも彼のために多額の餞別をおくったし、柳沢も外務省から五万円を引き出して島崎へのはなむけとしている」『日本ペンクラブ三十年史』（日本ペンクラブ、1967）、98～99頁。また「八、日本ペンクラブ代表島崎藤村、有島生馬両氏ブエノスアイレスに開催の世界ペンクラブ大会ママに出席に関し旅費補助の件来る九月ブエノスアイレスに開催の世界ペンクラブ会議に両氏出席、其後ボストンに赴き日本古美術展覧会を機とし博物館にて講演の予定なり。右費用補助として金三千円依頼出ありたるにより受諾に決定。」『国際文化振興会議事要録 第二十五回理事会 昭和十年八月九日午後零時半 於事務所』（ジャパンファウンデーション図書室所蔵）。
 - * 11 拙稿「『東方の門』執筆前の藤村」『島崎藤村研究』（第35号、2007年9月）、「南米の島崎藤村——国策的国际文化交流の再考——」『文学研究論集』（第26号、2008年1月）。ほか、2008年10月26日の日本近代文学会秋季大会パネル発表「戦前期日本ペンクラブをめぐる諸問題——日印文化交流と国際文化政策——」でも論じた。
 - * 12 *International Congress of the P.E.N. Clubs; XIV International Congress of the P.E.N. Clubs, September 5 to 15, 1936: speeches and discussions*, Buenos Aires: P.E.N. Club of Buenos Aires, 1937.
 - * 13 『藤村全集 第十四巻』（筑摩書房、1967）、151～152頁
 - * 14 注13に同じ、144～145頁。

- * 15 「南米旅行の帰路、北米へ、ボストンへ、ガアドナ夫人の旧居へ、と熱心に探り求められたものが何んであつたかと云へば、「茶の本」の著者の佛に外ならなかつた。即ち本書の第四章からその人が大映となつて表はるべく約束されてゐたと聞いている。」（『東方の門 跋』『東方の門』（私家版、島崎楠雄発行、1944年）。引用は注10に同じ、564頁。
- * 16 「東方の門」という作品名が、シャヴァンヌの絵画に由来することについては、今橋映子「至福の時間——ビュヴィス・ド・シャヴァンヌと藤村——」（『島崎藤村研究』（第16号、1988年8月）、のち『異都憧憬 日本人のパリ』（柏書房、1993）収録）ほかでしばしば指摘されている。東西文明融合の象徴として論及されるが、先行論ではインド・日本という観点はあまり省みられてこなかった。
- * 17 小池健男「『東方の門』の幸運」『島崎藤村研究』（第26号、1998年9月）など。
- * 18 ナーグの先見性は、現在ではハワイ大学でも十分認識されていない可能性が高い。例として、1975年にフォード米大統領が行った、ナーグも創設メンバーに関与したハワイ大学東西センターにおける「新太平洋ドクトリン」構想発表が挙げられる。これは、ベトナム戦争後のアメリカが、中国・インドネシア・フィリピン訪問後、ASEANとの関係強化等を狙って表明したものである。この構想内容はナーグの構想に近似する要素も多い。しかし、「ハワイ大学の前学長ハーラン・クリーブランド博士は最近次のように述べておられます。『1970年代後半、太平洋を1つのまとまった地域圏として考えようとする組織的な熱心な動きが突然始まった』（天理大学編『国際シンポジウム 新太平洋時代と心のコミュニケーション』（天理大学出版部、1984）、216～217頁）という言及が見られる。またハワイ大学東西センターでは、通史が出されていない。
- * 19 Kalidas Nag(1957); *Discovery of Asia, Calcutta: The Institute of Asian African Relations*, pp.746-747. 南米旅行の際の記憶とともに、好意的に言及されている。ただし、藤村の代表作として挙げられているのは *Yoake-mai* (Before the Dawn) in 1935 (傍線目野)、また *Nakai* (Breaking the Pledge, 1906) (傍線目野) とされていて、藤村作品を読んでいるのではないと推測される。
- * 20 ハワイ大学ハミルトン・ライブラリーには、戦前から戦後にかけてのナーグと Gregg Manners Sinclair との往復書簡・その写しが所蔵されている。この書簡中で確認できる日本人作家名は、ナーグが直接会話した経験があり、英語圏でよく知られていた詩人の野口米次郎だけである。野口は極端な国粋主義者としてのイメージが流通してはいるが、堀まどか・中山弘明らの近年の論考から、その国際的な活躍が再考されつつある。特に野口の国際社会での存在感に言及した論考として、堀「野口米次郎の一九二〇年代後期の指向性——雑誌『国本』への寄稿を中心に——」『総合研究大学院大学 文化科学研究』（第4号、2008年3月）。こうした野口のインターナショナリズムとナショナリズムを、表裏一体のものと解釈する見方に関しては、文化外交政策上の観点としては芝崎厚士『近代日本と国際文化交流』（有信堂、1999）、当時の文学者の行動様式としては前掲拙稿「南米の島崎藤村——国策的国際文化交流の再考——」参照。
- * 21 「萩窪の書斎で」『片山敏彦著作集 月報4』（みすず書房、1972年1月）、3頁。
- * 22 岡村敬二『遺された蔵書—満鉄図書館・海外日本図書館の歴史』（阿吽社、1994）、214～222頁。

本稿は、昭和文学会 2007 年 12 月研究集会における口頭発表「不在のナーグ—片山敏彦と野口米次郎の場合」（12 月 8 日、於二松学舎大学）に基づくものである。原稿執筆に際し、引用箇所の旧漢字は新漢字とし、ルビを省いた。調査に際しては、稲賀繁美、原督、東京外国語大学附属図書館、ハワイ大学ホノルル校ハミルトン・ライブラリー、藤井毅、同ライブラリーの James Cartwright にご協力を頂いた（敬称略）。また、学会発表に際しては、発表準備から質疑応答に至るまで、多くの方々にご助力を頂いた。これら全ての協力者に深く感謝する。

1930年代Nag関連略年表

年	月	事 項
1930		ドイツ、ナチ党台頭
1931		Nag、1930年から1931年にかけてアメリカと欧州で講演
	3	ガンジー自伝刊行、Senator Giovanni Gentile（ファシズム理論家）が序
	9	満州事変
1932		バルビュス、国際的反戦・反ファシズム運動を提唱し、ロマン・ロランと連絡。アムステルダムで、芸術家だけでなく物理学者も含めた知識人グループで集会を行う。
1933	2	日本、国際連盟脱退
1933		イタリアでIsMEOの原型成立。ムッソリーニが講演、インド側はNagが窓口となる
1934		Nag、義父の雑誌『The Journal of the Greater India Society』編集長となる。各種の文章をカルカッタから発信し続ける。Nagが1922年から死別まで慕い続けた友人、ロマン・ロランも寄稿。妻は作家。この年以降、この雑誌は1959年まで刊行され、1987年にリプリント版が刊行。
1934	4	東京で国際文化振興会成立（機能はIsMEOに近い）
	8	モスクワで第一回全ソ作家会議開催、アンドレ・マルローら招聘
	10	パリで全ソ作家会議の報告演説会（ジッド、マルローら）
1935	1	パリで二度目の報告演説会（パリ文化擁護国際作家大会準備、反ファシズムと革命で対立） 国際文化振興会は外務省文化事業部の管轄下に（国際文化事業を扱う第三課）、当局でペンクラブ設立準備開始
	6	パリ文化擁護国際作家大会 小松清編『文化の擁護—国際作家会議』（第一書房）
	7	Nagの肝いりでインドペンクラブ成立（彼はベンガル brunch の代表になる）
	11	日独防共協定 日本ペンクラブ創立総会（独、伊も速成で結成） 国際文化振興会、藤村のアルゼンチン行に助成金出資。英独仏語の日本文化紹介叢書刊行事業の開始
	12	国際文化振興会の中に、日本語学習支援等の実務機関である国際学友会成立
1936	1	ハワイ大学で、Nagの数年来の尽力を受けたThe Oriental Institute完成。日本や中国、インド研究のセンターとなる（ハワイ大学内の現東西センターは1960年設立）。1930年代から戦後まで、Nagとハワイ大学とは、学術的交流や家族ぐるみの同僚との交際・文通が継続。 インドで進歩主義作家協会が正式に成立（共産主義文学運動）
	7	横光利一、パリで講演（L'association porza）
	9	ブエノスアイレスで国際ペンクラブ大会。Nag、ベンガルペンクラブ代表として（前述の雑誌『The Journal of the Greater India Society』のEditorとしての会員資格）、藤村や生馬と邂逅。生馬とは直接、英語ないし仏語で会話したか。マリネッティら右派作家中心（左派は「文化の擁護」）。
	11	日独伊三国防共協定成立 生馬、大倉喜七郎はイタリアに、Nagはハワイに向かう
1937	6	Nag、“Above all nations is humanity”, University of Hawaii講演
1937	7	生馬、ミラノで日本美術について伊語で講演（IsMEOの招待）、叙勲 生馬、ソルボンヌ大学で日本美術について講演
	10	バルセロナ文化擁護国際作家大会

年	月	事 項
1937		Nag, “Above all nations is humanity”, University of Hawaii刊行
		Nag, “Art and archaeology abroad; a report intended primarily for Indian students desiring to specialize in those subjects in the research centres of Europe and America”, University of Calcuttai刊行
1938		インド人達、インド公安や英側の監視の目を恐れ、次第に日本との関係を撤収し出す
		国際文化振興会、カルカッタ大学教授・日印文化協会会員としてのNagに、日本の教育制度に関する資料送付
		Nag, “The Pacific Basin: a cultural survey” 刊行
	11	東京国際ペン大会中止に決定
1939	9	イギリス、対独宣戦布告
		Nag、カルカッタに日本図書室を開室したいとの希望を、在カルカッタ若松虎雄総領事に伝える。外務省は、対印文化事業に有益として認可
		Nag, “Cultural migrations in Oceania” 刊行
1940	2	外務省、日本図書室に出資しカルカッタに開室。利用者は一日平均3～4人。
	7から8	日英関係悪化により、Nagの日本領事館との接触・図書室活動が停滞、日本図書室の部屋の賃貸契約更新が不可能となる
	9	日独伊三国軍事同盟（以後日英は敵対関係、日印は交渉困難に）
		大政翼賛会発足、東京オリンピックや万博など中止
	12	国際文化振興会の所轄官庁が情報局に移管 国際文化振興会、南方文化事業に重心を置き直す。東亜共通語としての日本語普及が目指され、「日本語普及編纂事業七年計画」開始。
1941		Nag、国際文化振興会より “Prehistoric Japan” 刊行
		カルカッタの日本図書室の閉鎖・移管・継続等につき、外務省と国際文化振興会間で協議（結果は未詳）
		Nag, “India and the Pacific world” 刊行
		Nag、ハワイ大学The Oriental Instituteの親しい同僚（後にハワイ大学学長となったGregg M Sinclair）宛に、タゴールの死（そしておそらく日本軍の真珠湾攻撃も）を嘆く私信。これ以降戦後まで、Nagと日本との文化交流は中断。

- 参考文献： 『日本ペンクラブ三十年史』（日本ペンクラブ、1967）
 岡村敬二『遺された蔵書―満鉄図書館・海外日本図書館の歴史』（阿吽社、1994）
 ジッド他『文化の擁護 1935年国際作家大会』（法政大学出版局、1997）
 芝崎厚士『近代日本と国際文化交流―国際文化振興会の創設と展開』（有信堂高文社、1999）
 ハワイ大学ホノルル校ハミルトン・ライブラリー所蔵資料（Nag私信）
 Kalidas Nag; *Above all nations is humanity*, University of Hawaii, Honolulu, 1937
 Kalidas Nag; *Greater India*, Book Centre, Bombay, 1960.
 Mario Prayer; *In search of an Entente: India and Italy from the XIX to XX Century. A Survey*, Italian Embassy Cultural Centre, New Delhi, 1994